

## ウグイスの雄による巣立ちビナへの給餌

濱尾章二<sup>1</sup>・松原始<sup>2</sup>・梶田学<sup>2</sup>・三田村あまね<sup>3</sup>

1. 浦和市立南高等学校. 〒336-0026埼玉県浦和市辻6-5-31 E-mail: VZH01315@nifty.ne.jp
2. 京都大学大学院理学研究科動物学教室. 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
3. 〒606-8403 京都市左京区浄土寺南田町22

雌雄が子の養育をどのように分担するかという子の世話の雌雄分担のパターンは、その種の配偶システムと関係する重要な属性である(たとえば、山岸 1984, Davies 1991)。鳥類では90%以上の種が雌雄で子の世話を行ない、一夫一妻の配偶システムをもつ(Lack 1968)。その中でウグイス *Cettia diphone* は雄が子の世話に関与せず、発達した一夫多妻の配偶システムをもつ(濱尾 1992)。抱卵や巣内ヒナへの給餌は雌のみによって行なわれ(羽田・岡部 1970, Gao & Zhang 1985, 濱尾 1992)。巣立ちビナへの給餌も、巣立ちビナの群れ13群を観察した濱尾(1992)によると、すべて雌のみが行なっていた。隔離された大洋島で進化してきた小笠原のウグイスでは、雄の巣内ビナへの給餌が観察されているが(Hamao & Ueda 1999)、一般にはウグイスの子の世話は雌のみによって行なわれる。ところが、我々は人為的に攪乱された条件下ではあったが、雄のウグイスが巣立ちビナに給餌するのを観察したので、ここに報告する。

調査は2000年5月4日と5日に、京都府京田辺市の木津川河川敷で行なった。調査地は28.3haの中州状の砂州(34°50'N, 135°47'E, 海拔16m)である。調査地には裸地が多いが、所々に高さ5~6mのヤナギ類 *Salix* spp. やサワグルミ *Pterocarya rhoifolia* が生えており、その周辺には高さ2mほどのノイバラ *Rosa multiflora* のやぶがあった。このような、やぶをとまう高さ数mの樹木がある場所でウグイスの雄がさえずっていた。

調査対象の雌雄は発達したノイバラのやぶの部分で、5月4日の07:00~09:00にかすみ網をもちいて捕獲された。一方の個体は総排泄腔が突出しており、抱卵斑がなく、放鳥後さえずったので雄と、他方の個体は総排泄腔が突出しておらず、抱卵斑があり、放鳥後さえずることがなかったので雌と判定した(Svensson 1992, 濱尾 1992に基づく)。身体の計測は行なうことができなかった。捕獲した際、雄には緑、雌には赤の色足環を装着した。観察は5月4日15:42まで行なったが、その間終始雄を追跡したり、ヒナへの給餌を観察していたわけではない。また、5月5日07:00~11:00にも補足的観察を行なった。

巣立ちビナは5月4日の11:30に雌雄を捕獲した場所で発見された。羽毛の状態や大きさから巣立ち後ほとんど日を経っていないものとみられ(Hamao & Matsubara in prep.)、12:30までに4羽を手捕りで捕獲し、個体識別用の色足環を装着し放鳥した。

雄はヒナを捕獲し終えた12:30頃から、近くのヤナギの枝で「ヒュルルルケッキョケッキョ」

2000年10月23日 受理

キーワード：ウグイス、雄による子の世話

などと聞こえる谷渡り鳴きをくり返すようになった。やがて、ヤナギの枝先で3～5 mmの薄緑色の鱗翅目幼虫と思われるイモムシ型幼虫を捕らえ、それを3～4頭嘴にくわえると、ヒナのいるやぶに運んでいった。このような行動は、15:42までのあいだに少なくとも5回以上みられた。雄がヒナに給餌するところは直接観察できなかった。しかし、雄がヒナの近く(30～50 cm)に行くまでは嘴に幼虫をくわえているのがみえ、その後、よりヒナに近づいた後で(この間10秒ほどはやぶにさえぎられ観察できなかった)再びみると、幼虫をくわえていないという観察が少なくとも2度なされた。このことから、雄はヒナに幼虫を給餌していたと判断した。

雄の給餌を観察したあいだ、雌も2～3 mmの黒い粒状のものをくわえてはヒナがいるやぶに運んでいた。しかし、この雌は鳴き声を発することが少なく、やぶからやぶに素早く移動したので、雄と同様ヒナに給餌するところを直接観察することはできなかった。

15:12～15:42の30分間のヒナへの給餌回数は、雄2回、雌4回であった。観察時間は短いですが、この給餌頻度からみて、雄による給餌は少なくとも稀に起きていたのではないことがわかる。

上述の観察がなされた5月4日の12:30～15:42、ヒナは断続的に「チー」と聞こえる声を発していた。濱尾の新潟県妙高高原での観察では、通常ウグイスの巣立ちヒナは親が給餌に来た前後に「リュッ」、「チュッ」などと聞こえる声を発した。今回の場合、1時間にわたって調査者がやぶをかき分けてヒナをさがし、手捕りにし、標識・放鳥するという状態が続いた。さらにその後も、少なくとも観察は続けられた。このために給餌が妨げられてヒナが強い空腹感にみまわれたのかも知れない。また、ヒナや成鳥にはこの攪乱によって強いストレスが加わっていた可能性が高い。

5月5日も同じ場所で同じ成鳥の雌雄と巣立ちヒナが観察された。雌は食物をくわえてはヒナがいるやぶに飛んでいくのが観察されたが、雄が幼虫をくわえたり、ヒナがいるやぶにいったりすることはなかった。雄はヤナギの樹冠部でさえずったり、雌の「チャッ」という地鳴きに反応して谷渡り鳴きをしたりするだけであった。

調査者による攪乱があった5月4日には雄による給餌が観察され、翌5日には観察されなかったことから、雄による巣立ちヒナへの給餌はヒトによる攪乱のために起きた行動である可能性がある。竹野(1933)は禽舎でウグイスを繁殖させたところ、ふ化後間もない巣にいる雌に対して雄がクモを運び、雌がそれを受け取ったという。この場合も、飼育下であるため通常とは異なる行動が現れたのであろう。子の世話の雌雄分担のパターンはその種の重要な属性ではあるが、必ずしも固定されたものではなく、条件によっては変化する場合があるものと考えられる。

今回の観察は、河川生態学術研究会木津川グループの調査研究の一環として行なわれた。調査の機会を与えられた同研究委員会木津川研究グループ代表の山岸哲博士(京都大学大学院)に謝意を表したい。

## 引用文献

- Davies, N.B. 1991. Mating systems. Krebs, J.R. & Davies, N.B.(eds.). Behavioural Ecology - an evolutionary approach -. Blackwell, London. [邦訳：山岸哲・巖佐庸 (監訳). 進化からみた行動生態学. 蒼樹書房, 東京.]
- Gao, W. & Zhang, K. 1985. On the breeding behaviour of the Singing Bush Warbler. Acta Zool. Sinica 31: 162-169.
- 濱尾章二. 1992. 番い関係の希薄なウグイスの一夫多妻について. 日鳥学誌 40: 51-65.
- Hamao, S. & Ueda, K. 1999. Reduced territory size of an island subspecies of the Bush Warbler *Cettia diphone*. Jpn. J. Ornithol. 47: 57-60.
- 羽田健三・岡部剛士. 1970. ウグイスの生活史に関する研究1. 繁殖生活. 山階鳥研報 6: 131-140.
- Lack, D. 1968. Ecological adaptations for breeding in birds. Methuen & Co., London.
- Svensson, L. 1992. Identification guide to European passerines. British Trust for Ornithology, Norfolk.
- 竹野家立. 1933. 野鳥の生活. 大畑書店, 東京.
- 山岸哲. 1984. 繁殖システム. 森岡弘之・中村登流・樋口広芳 (編). 現代の鳥類学. pp. 64-86. 朝倉書店, 東京.

## A record of a male Bush Warbler feeding its fledglings

Shoji Hamao<sup>1</sup>, Hajime Matsubara<sup>2</sup>, Manabu Kajita<sup>2</sup> & Amane Mitamura<sup>3</sup>

1. Urawa-minami High School, 6-5-31 Tsuji, Urawa, Saitama 336-0026, Japan

2. Department of Zoology, Graduate School of Science, Kyoto University, Sakyo-ku, Kyoto 606-8502, Japan

3. Jodojiminamida-cho 22, Sakyo-ku, Kyoto 606-8403, Japan

We observed a male Bush Warbler *Cettia diphone* carrying food to fledged young. Previous studies showed polygyny and a lack of male parental care in this species. We spent an hour capturing the fledglings, which were making an unusual call. The feeding by the male was not observed the next day. Although this observation was made while there was human disturbance, it suggests that the parental care behavior does not always show a stereotyped pattern.

*Key words:* Bush Warbler, *Cettia diphone*, male parental care